

## 京都市立芸術大学学長 赤松 玉女

皆様、こんにちは。京都市立芸術大学の赤松玉女でございます。まずは、世界人権問題研究センターの設立三〇周年を心からお祝い申し上げます。この記念すべき節目を迎えられたことは、長年にわたって人権の調査・研究、学术交流に努めてこられた皆様のご尽力の賜物であると深く敬意を表します。これからもセンターがさらに発展し、国内外における人権の研究と啓発活動を推進していかれることを心から祈念しております。

さて、私たち京都市立芸術大学は、昨年の一〇月に、長年の拠点としてきた西京区沓掛からここ下京区崇仁地域へとキャンパス移転をいたしました。崇仁という厳しい差別を受けた歴史をもつこの地域に住む皆様のご理解とご協力を得て、移転が実現したことは、教職員や学生にとって改めて人権について深く考える貴重な契機となりました。このような考えを深めていくなかで、地域と大学、さらに国内外の多様な人々との交流を一層深める場を目指すことが、キャンパス移転の大きな柱の一つになりました。



いただきます。

京都駅からほど近いアクセスのよさは、研究者やアーティスト、さらには一般市民や海外からの訪問者が気軽に立ち寄れる場所となり、これまで以上に多くの人々に訪れていただくことができいております。また、世人研と隣り合わせになることで、これまで培ってこられた知見やお取り組みに、私たちの学生や教職員が直にふれることができる機会が増えてまいりました。すでに人権に関する研修や講義の開催、卒業生が展示に参加するなど、世人研と大学の間で

そして同じキャンパス内に世界人権問題研究センターが移転をされたことによって、私たち京都市立芸術大学と世界人権問題研究センターはまさにご近所さん、お隣さんとして新たなつながりを築くことになりました。これからはお隣さんの親しみを込めまして「世人研」と呼ばせてい

多様なかたちでの交流や取り組みが始まっております。こうした新たな連携が私たちにとつても貴重で大きな財産になつていきつつあるところです。

私は、芸術、とくに絵を描くことを専門とする者でございますので、専門的な人権研究や政策に関わられる皆様方の前でお話することは、とてもふさわしいとは思えなかつたのですが、創造や表現がもつ自由さ、そして芸術が内包する包摂性が、人権の理念とどのように結びついていくのかを考える機会をいただいたと思ひ直して、お引き受けすることにいたしました。

芸術はときに、私たちの言葉や論理を超えて人々の心に直接語りかける力をもっております。その力は、現代のこの分断を乗り越えて、人と人をつなぐ架け橋となる可能性を秘めております。誠に僭越ではございますが、その視点から芸術と人権について皆様とともに考えるひとときをもてたらと思つております。最後までお付き合いいただければ光栄でございます。

改めていうまでもないことですが、芸術、つまり美術、音楽、演劇などあらゆる表現活動は、子どもから大人まで、プロやアマチュアを問わず自由に表現することができる、自

由に楽しむことができる、いわゆる表現の自由そのもの、まさに人権の基本であり、象徴的な要素の一つであります。

さらに芸術には、社会問題や不正義をひろく訴える力がございます。芸術と人権を考えたとき、思い起こす作品があります。たとえばアフリカ系アメリカ人アーティスト、カーラ・ウォーカーは、洗練された美しい影絵、シルエツトを用いて、女性奴隷の悲惨な歴史を描いております。ドイツ人アーティストのアンゼルム・キーファーには、ナチスという自分の国の負の歴史を忘れないように訴える作品のシリーズがございます。日本では、丸木位里、俊の夫妻が原爆の図で原子爆弾の悲惨さを描き残して人間の尊厳を守ろうといたしました。そしてピカソのゲルニカは誰もが知る反戦の象徴的な作品です。芸術が、反骨や批判精神を纏つて社会に問いかけてきたことがわかります。

そしてまた歴史を振り返ると、多くの芸術作品が検閲や抑圧の対象となりました。たとえば、現在は名作として知られる作品が、発表当時には政治体制や社会規範に反するということで撤去されたり、論争を巻き起こしたりしたこともございます。表現の自由をめぐつては近年でも問題が顕在化しています。国家権力の検閲でなくとも、たとえ

二〇一七年のアメリカで、ホイットニー・バイエニアルという米国内では重要な展覧会がございました。ここでダナ・シュッツというアーティストが実際に起こった事件を題材に、黒人への暴力を扱った絵画作品を出品いたしました。これを見た一般の鑑賞者から、この作品の撤去を要求する声があがりました。その理由は、白人であるシュッツに黒人の苦しみを題材にする権利はないという誠に不寛容なものでした。そして日本でも記憶に新しい二〇一九年、あいちトリエンナーレで企画された「表現の不自由展」について激しい抗議活動から、展示の中止を余儀なくされるということがありました。

これらのエピソードは、一部の人々の不寛容や拒絶が激しさを増していき、表現の自由のみならず鑑賞する自由をも奪ってしまう結果となる、まさに現代社会の複雑さを物語るものであると同時に、芸術のインパクト、アートのものつ影響力の大きさを物語っているのではないのでしょうか。

美術に携わるものとして視覚芸術の例をいろいろとあげましたが、どんな国や地域、時代であっても、そのほかの音楽や演劇、文学などのジャンルであっても、さまざまな芸術が社会課題を訴えたり、あるいはまた人々の心に寄り

添って力を与えてきたりした歴史がございます。複雑で先が見えない時代といわれている現代においては、芸術は単なる癒しや共感を超えて、新しい視点や問いかけを提供し、世界の複雑さや多様性、そしてそれにまつわる人権についても、気づきや考えるきっかけを提供し続けていると思います。

さて、少し話を変えます。今年二〇二四年の夏、私は、ヴェネチア・ビエンナーレという国際美術展を見てまいりました。この体験をもとに現代アートと人権について少しお話してみようと思います。

まず、ヴェネチア・ビエンナーレのことをご説明いたします。ビエンナーレはイタリア語で二年に一度、隔年という意味です。二年に一度開催される世界最大級の国際美術展で、現代アートの分野においてもっとも影響力のあるイベントの一つとされております。

今年で第六〇回を迎える、約一二〇年以上の歴史をもつこの展覧会では、プレビュー、つまりメディアなどのためのお内覧会を含めると、今回は全世界から一〇〇万人以上の来場者を集めたそうです。参加アーティストの国籍も会場で見かける鑑賞者の人種も年齢層も実に多彩でしたが、過

去からずとそうだったわけではなく、この国際展の歴史の初期には、西側諸国が中心でありました。各国を代表するアーティストがヴェネツィア島の端にある庭園を会場として、そこに建てられた常設のパビリオンで展示を行う「美術のオリンピック」と称されるような形式が特徴でありました。日本も戦後早くから参加し、庭園内に独自のパビリオンを持っています。今も国を代表する展示を各パビリオンで行うという形式は踏襲されておりますが、一九九〇年代に冷戦が終結すると、従来の国々に加えて東側諸国、中東、アフリカ、アジアなどさらに多くの国々と地域が参加するようになり、展示形式も大きく変化しました。従来のパビリオンはそのままに、会場周辺の建物や街中の既存の施設を使用した展示が始まりました。グローバルな視点を取り入れたテーマ設定というのは、美術の動向というだけでなく、現代の世界の情勢を如実に反映していると同時に、今日では、先ほど申しましたように入場者数も大幅に増えて、世界中から訪れる人々にとってますます文化的なハイライトとなっておりまして。

繰り返しますが、ビエンナーレが発足した当初、芸術は西洋のもの、とくにヨーロッパ諸国、フランス、イタ

リア、英国といった文化先進国が中心となって西洋美術史の枠組みに則ったものでした。今でこそ多様性や平等性をうたう芸術の世界ですが、振り返れば当時はアーティストもキュレーターもディレクターもほとんど白人、しかも男性で構成されて、それは近年まで続いておりました。いわゆる美術の世界でも、そうした人々の価値観が支配的であったというわけです。しかし一九九〇年以降、このような構図は劇的に変化をし、冷戦の集結によって東側や発展途上国のアーティストが台頭して、近年ではようやくジェンダーバイアスを意識するようになり、クイアのアーティストを取り上げるようになってまいりました。

ここからは写真を使ってお話をしていきたいと思っております。毎回、ビエンナーレにはテーマがあるのですが、今回のテーマは「Foreigners Everywhere」、直訳しますと「どこにもいる外国人」という意味になります。このテーマのもと、南米出身者として初めての、そして性的マイノリティであることを公表している初の総監督が就任し、多様性と包摂をより強く意識した展示が行われました。

表に出る社会問題として、今なお起こる紛争や戦争、こうした明らかな人権侵害に注目が集まる一方で、私たちが

気づかない場所で人権が軽視されているような場面がございます。芸術はそうした見えにくい問題を可視化する力ももっています。今回テーマのもと、世界から集められた芸術家は、外国人、移民、亡命者、難民といった祖国を離れたアーティストに焦点を当ててゐるので、また異なるセクシヤリティやジェンダーを行き来することで迫害を受けたり、非合法化されてきたクイアのアーティストも多く取り上げられました。それから専門教育を受けていないアウトサイダーと呼ばれるアーティスト、自分たちの土地にもかかわらず余所者扱いを何度も受けてきた先住民のアーティストなど、心と身体それぞれの領域でフォリナー、外国人とされてきた芸術家を展示会場全体に点在させるかたちで紹介をするものでした。

具体的な例をいくつかご紹介いたします。これはアメリカ館です。アメリカは現代美術の先進国でございますのでいつも大掛かりな展示をするのですが、今回の選ばれた作家は、ネイティブ・アメリカンでした。アメリカ館で初めてのことでした。鮮やかな色彩、文様などを取り入れた絵画が展示され、そして彼らの文化において意味を持つ形や材料を使ったオブジェが置かれておりました。

こちらはオーストラリアの展示会場です。オーストラリアを代表するのも今回は先住民、アボリジニのアーティストでした。作品として提示されているのは、現代の人々から先祖をたどっていけるように、壁に手書きで名前が書かれたものでした。鑑賞者は、末裔の現代では西洋の名前が、親の代、祖父の代、曾祖父の代とたどっていくと先住民の人たちのお名前であることに気づきます。遠いルーツから多くの人々が辿った歴史の先に現代がある、そしてまたその人たちが登録した書類が美しくインスタレーションされていて、静かに多くの人々の様々な物語があったことを想像させるといふものでございました。

こうした国を代表するような作家たちの他にも、テーマに則った展示がありました。これまでも複数のアーティストのコラボレーション作品などはありませんでしたが、この頃は「コレクティブ」といってアートプロジェクトのもとに名もなき人たちがたくさん集まってきて一つの作品をつくっていくという取り組みが世界的にも日本でも行われています。この国際展でこうしたコレクティブの作品が数多く取り上げられたのも特徴的なことでした。

こちらは、国籍はフィリピンの女性の作家でしたが、多

くの国々を家族や仕事の都合で行き渡っていくという人生を送ってこられた方です。そんな状況の中でパッチワークという手法を使って、一つ一つモチーフをつなげ、さらに刺し子のような刺繍をして手仕事で作品をつくりあげていくという、こうした従来の美術展では見かけない手芸的作品も展示されておりました。

この作品は、二〇世紀最初の女性の作家ですが、精神病院に長く入院をされていて精神科の先生が発見し支援した、いわゆるアウトサイダーアートが見出され始めた頃の人です。今はスイスの美術館にたくさんコレクションがあって、その中からの出品もございました。

こうして見てまいりますと、この現代アート展は、社会的に周縁化した人々やマイノリティが自分の経験やアイデンティティを、芸術を通じて表現し、グローバルな観点からダイレクトに訴える場となっているようです。こうした芸術家が今までいたにもかかわらず、なかなか国際的な大きな場所ではスポットライトが当てられなかったというところに気づかされるような展示でありました。もはや、キャンバスに絵の具や紙に墨といった専門的な材料ではなく、日常的な素材、工芸というより手芸のようにもっとポピュラー

な、フォークロアな素材による、しかし魅力ある作品も多く、これまでの美術が持っていた西洋的なもの、専門的なものから価値観を解放することが大きなテーマにも見えてきます。

こうしてみると、芸術はもはやその中心になるものが、造形のオリジナリティーや、新しいテクノロジーだけでなく、社会の多様性と共生を象徴する存在になってきていると思えました。二年に一度繰り返されるこのビエンナーレでも、世界が直面するさまざまな課題が展覧会のテーマとなり、作品が集められ、アートマーケットを牽引するというよりも、芸術が社会問題を考えるきっかけを提供する手段として重要な役割を意識していると思えました。

最後の例として、これは私が今回の展示でいちばん気に入ったものです。一つの大きな部屋にたくさんスクリーンがありまして、それぞれにヨーロッパの地図と手が動画で映し出されています。それぞれの画面で地図に赤い線を引きマークをつけているのは難民で、どこから一つのまちへ船などで入り、難民として認定されたり、認定されなかったりするのですが、仕事を求め生活を続けていくために、そこから次から次へと場所を渡り歩いていくという道

筋を、それぞれの方が語っておられます。これはその跡を記録して作品にしたものですが、いくつものスクリーンが並ぶ会場を巡って最後に見る展示では、それぞれの難民の人が歩いた地図上の線をまるで夜空の星座のように点と線で描かれていて、彼らの軌跡が最終的に星であるとか星座であるとか、何かそういった希望がもてるような美しいかたちとなって示してあるというものでした。複数の動画、平面の展示など、いくつものメディアを使い、インスタレーションとして大掛かりなものでしたが、わかりやすく、面白く、かつ美しい展示として見る事ができました。ここには、現代の社会的な状況を自己の視点から観察し、現代のテクノロジーを駆使しつつ、表現に落とし込むアーティストならではの作品だと感じたので、ご紹介いたしました。ビエンナーレを見にこられる人たちが、先ほど一〇〇万人を超えたと申しあげましたけれども、それはアート業界のプロフェッショナルあるいは芸術に興味のある人たちだけではなくて、近年、教育部門を最重要視し、学生や学齢期の若者たち、子どもたち、教育機関との連携を強めている結果であると言えます。これは芸術が未来の社会を構成する重要な役割を意識したものであるのではないでしょ



うかに注目をしているということを物語っていると思います。

コロナを経験した今、世界の人々が集まる場所で多様なアートを体験する機会がきわめてその重要性を感じさせるものとなりました。他者と同じ空間で作品と出会い、作品を通して新たな価値と出会って、感覚を共有する体験は、誰にとっても単なる娯楽以上の意味をもちます。現代の芸術は社会や環境の変化について問題提起を行うだけでなく、多様性を尊重しあい、ともに生きるためのアイデアを生みだ

す手助けをしています。これからの時代においても芸術はその自由な表現や革新性を通じて、多様な人々を結びつけて新たな社会の可能性を示してくれると思います。ぜひ注目していただきたいと思います。

お話してきましたように、芸術は、社会が抱える矛盾や可能性を浮き彫りにするもの。そして芸術を通して、他者とのコミュニケーションを促し自分自身とも向き合う機会、未来と過去と対話する場を提供します。これはよりよい未来を築く上で欠かせないことだと思っております。お話しいたしましたヴェネチアのビエンナーレは、芸術という視点を通して、文化やそれぞれの民族の視点の違い、過去と現在、現在と未来、それぞれが隔絶してきた歴史を感じつつも、同時にまた、芸術だからこそ、それぞれの抱える孤独を超えて、あなたたちと私たちが出会おう道を指し示すことが出来るのだと希望を持たせてくれました。

展覧会自体は、正直なところ、前回よりも入場者数が若干少なく、専門家の間では厳しい意見が飛んだりもしておりました。しかしながら、現代を映し出す国際展覧会ということで、非常に踏み込んだものであったなというのが私の感想でございます。

さて、ここで再び私たちの京都に立ち返りたいと思います。京都市立芸術大学は、一八八〇年に京都府画学校として設立されたときから数えて今回が九回目の引っ越しになりました。一〇カ所目の新キャンパスということになりました。この移転に際して私たちは、先ほど市長がお話くださいましたけれども、「テラスのような大学」をキーワードにいたしました。大学の更なる発展を目指しているところで

す。

京都市立芸術大学には使命がございます。まず一つ目は、これまで同様、芸術家、音楽家、デザイナー、クリエイターを育成し、京都で、日本全国で、そして世界で活躍する人材を育てていくこと、これが第一の大きな目的であります。そして二つ目は、まちとゆるやかにつながる、開かれたテラスのような大学の実現でございます。郊外から街中への移転を果たしたことで、多くの方々にとってアクセスが格段によくまりました。この新しい場所で芸術を通じて、芸術の視点、つまり普段と異なる視点や捉え方を提供し、性別、年齢、性的指向、国籍、障害のあるなしにかかわらず、人々が芸術にふれる機会を創出したいと考えております。

そもそもキーワードに掲げた「テラス」という言葉は、ま

ず日当たりがよく、風通しのよい、楽しいイメージがあります。テラスは建物から外に張り出したスペースですけれども、庭ではなくて少し浮いた場所、そこに立つだけで気分が上がる場所、日常の景色がほんの少し違って見える場所、そんな非日常な場所です。そのため、新しいキャンパスでは「テラス」をキーワードに施設や建築構造にもそれを反映させました。囲いや門を設けず、開かれた空間がたくさんあり、芸術の現場に気軽に足を踏み入れていただくことができるようにいたしました。ここで驚きや不思議、日常とは少し異なる体験をしていただきたいと思っております。そして公立大学である私たちを支えてくださっている京都の人々や産業に向けて開かれた存在でありたいと願っております。学内外の多様な人々が芸術を軸に交流し、刺激し合い、ともに成長できる、そういった大学を目指しております。

このキャンパスが京都のまちにとってテラスのような存在となり、芸術を身近に感じていただいていた新たな気づきを得たり、なによりつながる楽しさを感じられたりする場所になることを願っております。そして相手を尊重し、お互いの話に耳を傾けて、そこからまた新しい何かが生まれて

る、そんな創造の現場であり続けたいと考えております。

この機会に、昨年移転して以降の大学の様子も紹介したいと思います。これは去年の秋ですが、大学の一部の広場を「崇仁テラス」と名づけまして、そのお披露目をしたときの写真です。ここでは地元の小学生が演奏してくださり、学生たちや本学伝統音楽研究センターの教員も参加して、一緒にお囃子を披露させていただきました。自治会の皆様、地元の皆様には大変お世話になりました。

それ以外にも、春まつりであったり、JＲ線の南の東九条マダンであったり、東九条芸術祭であったり、そういう機会に学生たちの作品や、お祭りのときにはこうしたお神輿と一緒に引つ張ったり押ししたりして盛り上げていくということもさせていただいております。もちろん、いわゆる絵を描く授業でも、街に入って、写生をする風景を描くということを崇仁、東九条を中心にしてやろうという、これは教員と学生たちの取り組みで、展示もさせていただき、多くの地元の人々に楽しんでいただき喜んでいたできました。次に学生たちの自主的な取り組みを一つご紹介します。昨年引つ越し直後に、「いきいきちいさな芸術祭」というワークショップなどを含むイベントを学生たちが企画しま

して、「私たちをどうぞよろしく願います」ということを地元の人たちに向けて行いました。そして同じメンバーが今年自分たちが崇仁の一員として、広く崇仁を紹介するツアーを企画してくれました。これも自分たちが持っているデザインや工芸の技術をもって人を集め、そして自分たちと地域のつながりを深めていくことの一例だと思います。

さらに、上回生になりますが、自分が地域に入っている一つ一つインタビューをしてマップをつくり、それを染めて炬燵布団にし、ここにみんなで入れるような空間をつくるという、調査からの作品制作、そして作品を介したコミュニケーションの場づくりに取り組んでおります。

また音楽学部のほうでは、学生たちが教員と共に地域の小学校に入って、小学校の先生と一緒に新しい音楽の鑑賞授業をつくっていく、そういう取り組みもございました。

大学構内では、大きな堀場信吉記念ホール、もう少し小さい笠原記念アンサンブルホールといった自慢のホールで、たくさんさんのコンサートが行われ、地域の皆様、京都の皆様、さらには遠いところからも多くのお客様がきてくださっております。また、海外から講師を招き、マスタークラスを

行っていたりなど、いろいろなことができております。

以上、駆け足でしたが、いろいろな学生たちの取り組み、あるいは大学をめぐる取り組みも、地域の人々あるいは他の機関と一緒に取り組んできたことをご報告させていただきました。

お話のまとめとして、繰り返しになりますが、芸術は、人間のありようを映し出す鏡であり、よい面も悪い面も可視化をします。作品を通じて人々に問いを投げかけ、深い思考へと導く力もついています。とくにこの厳しい時代において、私たちにはさまざまな知識、知恵、あるいは感覚、直感を結集して、ともに乗り越えていかなければならないという事態がございます。「私たちは芸術を通じて、世界の交差点に立ち、それぞれの歴史や経験、美の進化、表現の自由にふれることができる。その度に自分自身の狭い枠をこえ、他者とのつながりを実感することができるのだ」と先ほどご紹介したヴェネツィア・ビエンナーレの主催者が述べております。

つまり、芸術は、新たな価値観、他者との共感、多様性を尊重する社会への鍵となります。世界人権問題研究センターと京都市立芸術大学が協力を深め、情報の交換や交流

を重ねることは、予測が難しい複雑な時代と言われるなか  
にあつて、未来をともにつくっていく大きな力となるでしよ  
う。本学の芸術的な知見が世人研の研究とともに活用され  
ることで、さらに大きな可能性を生むと信じていますし、楽  
しみにもしております。

最後に、世界人権問題研究センターのますますの発展と、  
本日ここにお集まりの皆様のご活躍をお祈り申しあげ、そ  
して私たち京都市立芸術大学と末長くお付き合いをしてい  
ただくことをお願い申しあげて、私のお話を終らせていた  
だきます。本日はありがとうございました。おめでとうございます。  
ございます。